

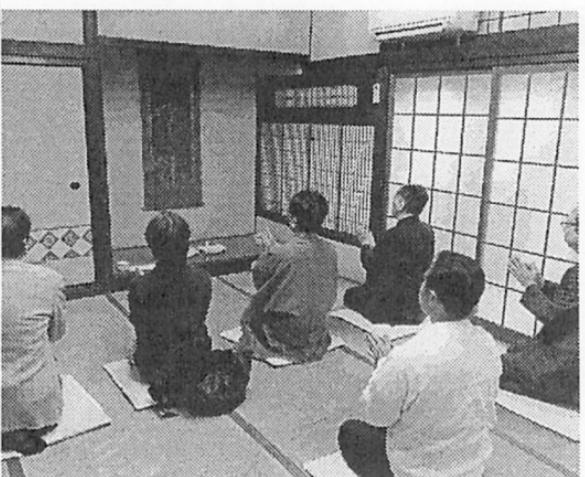
やまと 民俗への招待

鹿谷 繁

昨年11月18日に春日大社で「春日講」をテーマにした『おん祭への招待』という講座があった。ここで私は、県内の信仰的講集団について、写真を用いて概要を紹介した。講には、信仰的講集団と経済的講集団がある。前者には、信仰の対象が地域社会にある村内講とその対象が外にある代表講がある。奈良県では、伊勢講、愛宕講、庚申講、金比羅講、山上講、觀音講、地蔵講、大師講、念佛講、報恩講をはじめ、実にさまざまな講集団が活動を続けてきた。こうした各種の講のなかでも、文献や絵画や奉納灯籠など豊富な資料でその

歴史的な展開を迎えることができるのが春日講だ。

九条兼実の日記『玉葉』にあるように、12世紀の終わりごろから、京都在住の藤原氏が、春日要茶羅図を祀って春日社の遙拝を始めた。これが興福寺に波及し、源氏の子弟などが入寺した院家門跡、また興福寺の下に組織された武士たちの間でも室町期に盛んに行われた。北面方春日講」「寺衆中春日講」「衆徒春日講」などに散見され、さらにいって、奈良町では餅飯殿町の春日講が最初で地や奈良町へも伝わってあると言われる。



奈良市東城戸町の春日講—筆者提供

歴史伝える春日講

講座当日には、奈良市文化財課の岩坂七雄氏が奈良市内の京終、北市、東九条などの春日講を紹介し、さらに東城戸町の森克容自治会長が、地元の春日講の活動を詳しく紹介された。

今年1月11日に、この東城戸町(30戸)の春日講を拝見させていただいた。朝9時すぎから町内の大国主命神社で、自治会の行事として行われた。境内の会所に、自治会長以下役員と町内3組の組長などが集まり、東向きの床の間に室町時代

16世紀の制作とされる春日宣寧荼羅を掲げ、口ウソク一本と御神酒、結び昆布とスルメを供え、一同で拝礼する。終わると御神酒をいただく。

この後、10時に氏神の御靈神社に向かい、新年の祈祷をし、さらにここから春日大社へ向かう。春日大社では、祈祷所での祈祷をし、さらにここから春日大社へ向かう。御神樂をあげて、本殿さらに若宮社に参拝する。終わると市内の店で直会を行う。昔は、役員以外の人々もこの春日講に集まり、にぎやかにひとときを過ごしていたといふ。

(奈良民俗文化研究所代表)

次回は2月13日